

プロローグ

水の底とも地の底とも知れぬ、闇に包まれた深い底。
一隻の帆船が出航の時を待っている。
闇を払うように、高らかなファンファーレとともにマーチングバンドがやって来る。
大いなる海原へ飛び立つ者たちへの賛歌のように闇を払い、風を切るように出航を祝う。
向かう先には何が待ち受けているのか。
とりあえず　B O N　V O Y A G E !

一場

波止場にて

闇はほの暗く、霧まで立ちこめている。

闇の中、さと子が立ち尽す

さと子に近づいてくる人影。

家政婦会の家政婦達。大場春子、有田のぶ子、大竹章子である

さと子が子供時代を過ごした海の向こうの町へと船の旅に発とうとしているところだ。
皆、なにやら不安を抱えているように見える。

さと子　おかしいね…

春子　どうしたんだらう…

のぶ子　何かあったのかな…

章子　まさか…!

さと子　変だよな。

春子　携帯！携帯！智ちゃんにかけてみよう！

全員　（口々に）そうだ、携帯、携帯！

春子、慌てて携帯電話をかける。

春子 …あ、もしもし…え？あ！元気？…うん、そうか…
全員（口々に）誰にかけてるのよ。こんな時に、もう？
春子 ごめん、間違えた（かけ直す）

足元においた誰かの鞆の中で、着信音が…
音のもとを見つける。

のぶ子 智ちゃんのカバン！（ポケットから携帯電話を見つける）携帯！
章子 持ってなかったんだ。
春子 ああ（携帯を切る）
のぶ子 どうしたんだろう。
章子 何かあったのかなあ。
春子 間に合うかなあ。

不安が一気に盛り上がる。
妙な声が風に乗って聞こえてくる。耳をすましてみれば…
智子が息を切らして走り込んでくる。

智子 ごめ〜ん、ごめ〜ん！
全員 智ちゃん！！
春子 あったの？パスポート！
智子 あった〜！
章子 どこにあったの！？
さと子 パスポートは？

智子 忘れてた〜！

のぶ子 だから、どこにあったの？

智子 えへへへ…（おもむろに帽子を取って内側を見せる）ここ！

全員 はあ！？

智子 （帽子の内側の隠し布の奥にパスポートがしまわれている）大事にしすぎたあ。
春子 なんて忘れるのよ〜！

のぶ子 わかる、わかる。あるある。メガネなんか、頭に乗つけたの忘れて、探すよね。

全員 あるある…

さと子 ああ〜！！

全員 なになに！

さと子 忘れた〜！

全員 何を〜？

さと子 梅干し！あれがないと、私、私…

のぶ子 あ！ある！私、梅干し、もってきた！

のぶ子、スーツケースを開けて、梅干しのビンを見せる。

ピンを開けてさと子に梅干しを差し出す。

みんなで梅干しをつまんで食べる。

章子 すっぱい、すっぱい〜うっす、すっぱあい〜、すっぱ〜！

春子 なに、なに？

智子 上がっちゃってるみたい。

章子 だって、私、初めての海外よ！初めての船旅なのよ。芦ノ湖の海賊船に乗るのはワケが違うんだから。

智子 でも、もうジタバタしてもしょうがないですよ。

さと子 なんだか不吉な言い方ですねえ。

智子 えっ！私、なんかいけないこと言った？

さと子 ジタバタしてもって…

智子 たとえよ、たとえ。船に乗っかつちゃったら、船長さんに任せるしかないでしょ。私たちはもう、まな板のコイなんだから。

さと子 まな板のコイ？

智子 だから、一緒になつて「おもかじいっぱい」とか「甲板掃除始め」とかやれないでしょ。
智子 だめ。私、やっぱりダメ。ティッシュ！ティッシュ！（どうやら、もよおしてきたらしい）

春子、のぶ子、智子はそれぞれ大急ぎで持っているティッシュを章子に渡す。

智子 大丈夫かしら、章子さん。

春子 大丈夫、ダイジョウブ！ あの人、出かける前はいつもああだもん。ああいう人に限って、向こうに

着いたら一番張り切るんだよ。観光地どこ？お土産買わなきゃ！ おいしいものはどこ？って…あ、さと子さん、向こうに何かおいしいものある？

さと子 小さい頃食べたので、これだけは覚えてるの。ワッゼイモウモウウメドオウ。

三人 なにそれ？

先ほど、どこへやら走り込んだ章子が、清々しい声で戻ってくる。

章子 ねえねえ、向こう行ったら、ワッゼイモウモウウメド、食べない？

三人 知ってるの？

章子 知ってるわよ。牛の姿焼き。さと子さん、ブーチュウスイスイ知ってる？

さと子 知ってる。

三人 ナニそれ？

章子 ブタ！ ブタの姿焼き！あ！まただ…（またもやモヨオした様子で走り出す）

春子、のぶ子、智子はその後ろ姿を見ながら、あきれている。

さと子　ねえ、やっぱり潮風にあたると体によくないんじゃない？

のぶ子　何がよくないの？

さと子　やっぱり体にさわるんだわ。

智子　：「夜風は体によくないよ」って言うよね。

春子　夜風は夜風、潮風は潮風。

章子　（手を拭きながら戻ってくる）潮風っていうのは体に悪くはないよ。

春子　あら、あんた、治ったの？

章子　治った。あのさ、海辺に療養にいくとか言うじゃない。

のぶ子　そうよ。海辺の人って長生きよ。長寿日本って確か、海辺の人よ。

さと子　それは人の寿命ですよ。こんなに風が吹いてると、船も揺れるんでしょうね。私、船に弱い。もし

滑ったら船酔いするかもしれない。船が揺れて、私は柱に掴まっていけないと船室の隅までズズッと

たって、あ、コブが、あ、血が、誰か来て、誰か助けて、って叫んでも、嵐の中で私の声は届かない。

だんだん気が遠くなっていく私……

さと子さん、どうしたのよ！私たちの乗る船は大きな、丈夫な船なの。だから、大丈夫って言うの。

揺れない、揺れない、大丈夫、大丈夫。

智子　春さん、それホント？

春子　ホント。大船に乗ったつもりでって言うでしょ。ほら、そろそろ出航の合図があるんじゃない？

それぞれ荷物を抱えて棧橋に向かおうとする。

のぶ子　あ！春さん、写真、カメラ！記念撮影！

春子、カメラを取り出し、構える。

全員、一カ所集まる。

春子　並んで。

並んで。

並んで。

並んで。

並んで。

並んで。

四人 並んだ。
春子 並んでる？
四人 並んでる。

春子、セルフタイマーをセットする。
四人 春さん、早く早く！

カメラのシャッターが降りる。

のぶ子 あれ、光らなかつたんじゃない？
春子 だつてフラッシュ、こわれてるの。
章子 春さん、写真係だつたでしょ！
のぶ子 じゃあ、夜は絶対写真、撮れないってこと？
春子 そうなの。だからさ、暗くなつてからは思い出になるようなことは止めよう。そうだ、そうだ。
のぶ子 あらあ、ガツカリ。
章子 夜が楽しいのに。

智子 私、写真嫌いだからいいわ。
章子 あらあ、どうして嫌いなもの？
智子 写真うつり悪いの。よく写りたいわ、気取ると恥ずかしいわ、自然にすると暗くなるわ。それにさ、この身長でしょ。変に目立つちゃつて、どうしたらいいかわかんないのよ。
春子 智ちゃん、あんたどうして宝塚に入らなかつたの？
智子 またあゝ春さん。

春子 だつて、その身長！宝塚に入つてたら今頃トップスターだよ。ああ、もったいない。
さと子 春さん、それ、単純すぎですよ。
智子 そうですよ。春さんたらね、初めて会つた時もそうだったんですよ。宝塚に入りませんか。あなほどの身長のある人が、ただ街を歩いているだけではないけません。その身長は宝塚の大階段を降りてこそ値打ちが出るといふものです。大丈夫、大丈夫。」って。

さと子 春さんって宝塚のスカウトやってたんですか？

春子 なんて私が宝塚のスカウトなのよ。私はずっと昔から家政婦。天使の恵家政婦協会、またの名をヘルスエンジェルスの会長をやってる大場春子です！

智子 その家政婦さんがよ、踊ってたのよ。ド派手なカツコで、新宿の歩行者天国だよ。

さと子 踊ってた？！やっぱり宝塚かなんか？

章子 違うの。ヘルスエンジェルスの二十周年だったの。それで、のぶさんが一度でいいから人前で派手なことやろうって言ったの。

春子 そう！ 人前で話すのも苦手だった人がよ、派手なことやろうって言い出したのよ。だからこの際バ

ーッとやろうって…

さと子 のぶさん、苦手だったんですか、人前に出るの。

のぶ子 そうなの。高校の時、私の前の席に、岡部さんっていうすごくきれいで、頭のいい人がいたの。1時

間目が終わった後、「起立！礼！」…岡部さんのスカートがめくれちゃって、パン・ツアー・マルミエ！

ああ、もうなんとかして教えなきゃって思うんだけど、言えなくて、キズつけそうで。何も言えなく

て、ずっとついていったの。

さと子 ずっとついていったんですか？

のぶ子 そう、ずっとついてったの。なにげなく隠しながら後ろにくっついていったの。ずっと。そしたら、

岡部さん、急に振り返って「あんた、なんでついてくるのよあ！」…ショックでね。それからなの、

人に話しかけるのが怖くなつて、ずっと人目をさけて生きてきたの。

春子 その方が一番乗っておられました。

のぶ子 悪かったかしらん。

智子 だからって家政婦会が踊ることないわよね、キラキラパンツはいて…あっあああ！

春子 どうした？

智子 め！

全員 めえ？！

智子 目！ 目が、ずれた！コ、コン、コンタクト！ あ、あれどこ、どこ。ね。見て見て。

みんなで智子の目を覗き込んでずれたコンタクトを探す。

上？下？右か左か？目のどこにも見当たらない。

智子 下に落ちたのかもしれない！

全員、大慌てで地面を探し始める。

智子 動かないで！！

全員（口々に） 動かないでどうやって探すのよ？この足はどうすればいいの…

智子 静かに！

のぶ子 なんで静かにしなくちゃいけないのよ？

春子 割れるんじゃないの。

章子 あ！足、つったー！

四人 ええー！

のぶ子 どっち、どっちの足？

章子 こっち！

のぶ子がつった足を伸ばすとどうやらおさまったらしい。

さと子 あったー！

四人 えっ！どこどこ？

さと子が指差すモノを見ると…

智子 全然違います。

四人（口々に） なんだ、違うじゃない。魚のうろこじゃないの。

四人、すっかり忘れてその辺をだらだら歩いてしまう。

智子 ああゝ！ペロペロ歩かないで下さい！

全員、慌てて地面にはいつくばって探す。

のぶ子 ねえ、コンタクトっていくらくらいするの？

智子 48000円…

四人 高い！

のぶ子 ええと、2枚で9万…六千…探さなきゃ！

春子 二つなくしたの？

智子 一つです。

さと子 片方だけなら片方買えばいいんじゃない？

のぶ子 ああ、そうか。

春子 私の友達、よくコンタクトなくすんだけど、見つかったためしがないの。雨の日とか、夜とか、ぜ

んぜん見つからないよね。

智子 もついい。あきらめる。

章子 ダメ！あきらめちゃダメ！ここからが肝心なんだから。私、拾い物するのすごいまいの。不幸の

底なし沼から幸福だって拾ったんだから。

さと子 不幸の底なし沼？！

章子 そう。あのね、私の家は没路農家だったの。それで、金の卵として紡績工場に集団就職、そして結婚、

そして出産。

さと子 幸せそうですね。

章子 そこまではね。その後、夫が働き過ぎで不治の病に冒されて…

さと子 もしかして…

章子 もちろん結核よ。子供にも伝染して、みんな死んじゃったの。私、もう疲れたの。

春子 疲れた時に考えることって口クなことないわよ。

章子 そうなの。死んでしまいたい、もう死んでやるう。そんな不幸のどん底で拾った幸福が、一枚のピラ

だったの。

さと子
ピラ？

章子
そ！そのピラに「死んであだ花咲かすより、生きて咲かそう他人花。あなたも天使になれますよ」そのピラの行方を追って、たどり着いた所が天使の恵家政婦協会。玄関をガラリと開けると、そこに春さんが三つ指ついて待ってたの。私の顔を見るなり、「大丈夫、大丈夫」って。

智子
あ。あつたあゝ！

章子
よかつたねえ！ ね、あきらめるもんじゃないんだから。

全員
そうねえ。

智子
灯台下暗し。

全員
そうねえ。

のぶ子
幸せは自分の足元から探せって。

全員
そうねえ。

さと子
あつ、ちよつと、あそこに変な人がいる。

四人（口々に）
キャーッ！ ちよつと、ヤダヤダ。助けて！ ドーショー…

五人は身を隠す所もなく、ひとかたまりになつておびえる。

さと子
ちよつと、この辺つて物騒なんじゃない？ 夜の港つてよく事件が起きたりするんじゃない？

智子
ただ船を待つてゐる人が殺されるってことはないわよ。

春子
知らん顔して、知らん顔して。普通にして、普通にして。…あ、船が…

みんな、緊張しながらも、《普通》を装う。

何も起こらない。

智子
らち、あかないじゃない。

のぶ子
どうするのよ。

章子
あつ！ 春さんが見てくるって。

春子　ワ、ワタシ、そんなこと言ってないよ。
章子　言った。見てくる、見てくるって、言った。
春子　言ってないって。
四人　お願いします。

春子、しぶしぶ見に行く。

のぶ子　春さん、もっと普通にさりげなく行った方がいいと思う。

章子　春子、さりげなく普通に歩き出すが、背中には緊張感が隠せない。
春さん！　やめた方がいいと思う。
四人　アッ、ビックリした。ビックリしたあ！　（何故か、章子を袋叩きにする）　なんで、あんたはそう

なの。　なんでなの。

章子　だって、だって、一人で死なせていいの？

春子　なんで私が死ぬのよ。

のぶ子　じゃあ、二人で死んできて。（二人を押しやる）

春子　あんた、先に死ねばいいじゃない。

章子　いやよ。あんた、先に死んでよ。

春子　なんでよ、もう。

二人、及び腰で偵察に向かう。

春子　押さないでよ。

章子　押さないでしょ。おしり、さわってるだけでしょ。

春子　さわらないでよ。

章子　さわらせてよ。

春子、誰かを見つけたかのように叫び声をあげる。

全員　ギヤアアア！

春子　いないよ。誰もいないって。

智子　（急に勢いづく）バアロー！　出てこい、コノヤロー！

さと子　でもね、革靴の足音がコツンコツンって近づいてきて、ハッと振り返った途端、ドンッて海に突き落とされるかもしれない。

のぶ子　なんで、なんでえ？　私達に恨みを持っている人がいるっていうの？

春子　あら、のぶさん。今は恨みを持つてない人でも、何だ、その目付きは！何だ、その顔はってブスッ！

バーンッて突き落とされて、朝になるとプカプカ浮いてるのよ。顔なんかこんなに水ぶくれになって、あ、あれ、のぶさんだ。

章子　ほんとだ。

智子　鼻から出てるの、何！？

（口々に）あつ、ウジだ、ウジ。臭い、臭い。金バエだ。汚い。

三人盛り上がる。

のぶ子、さと子が不安にかき立てられている様子に気がつく。

のぶ子　春さん、春さん！

春子　あつ、さと子さん！　そういうことはないわよ。大丈夫よ。

さと子　やっぱりあるんでしょ。二、三日前も家の前に変な子供がウロウロしているから、一人暮らしたと

思ってバカにしているんだわ、ひと言、言ってやんなくちゃって。思い切って表に出てみたら、もつけないの。

章子　さと子さん、またなの。そういう時は知らんぷりしてた方がいいよって、口すっぱくして言っただけじゃない。

のぶ子　そうよ、そうよ。私もすっぱくして言った。さと子さん、子どもなんてね、わけわかんなくているん

なとこ、ウロウロするものなんだから、サ。

さと子

私も一度くらいじゃ頭に来たりしないわよ。夜になつたら今度は別の子がウロウロしてたの。それで明かりをつけて表に出てみたからお勝手の方で音がするじゃない。急いで行つたらもういないの。やっぱり私のこと、からかつてるのよ。どつから私のこと見てるんだわ。もう怖くて怖くて。ホント、近頃のお子さんつて夜遅くまで起きてるでしょ。親御さんはいつたいどうしていらっしゃるのかしら。さと子さん、そんなふうになににしているから毎晩毎晩、変な夢見るんじゃないの。それで眠れない眠れないって。

章子

さと子

あら、皆さんだつて眠れなかつたり、夢見たりすることあるでしょ？

章子

私はまったくありませんね。

のぶ子

夢つて面白いものよ。

さと子

私ね、この前夢の中で泣いちゃつたの。時計見るとまだ夜中だから、泣きながらまた寝るの。そうすると、また同じ夢見るの。

のぶ子

どんな夢？

さと子

広い野原の真ん中に、大きい木が立っているの。その木の根元に子どもがいるの。とっても遠くにいるんだけど、その子の手についた土とか小さな頭の髪の毛の一本一本までくつきり見えるの。その子はその木の根元の土を掘ってるの。一生懸命掘ってるの。

章子

子どもの頃、何か埋めたことあるんじゃないの？

智子

それがきつと、何か大切なものだったんだよ。

さと子

覚えてないの。

春子

みんなも子どもの頃、よく埋めなかつた？ 私、子どもの頃、隣のしげちゃんからピストルぶんどつて「私の宝物」なんて埋めたことあるんだ。だからさと子さん、あれだ、さとさんも人のもの取つて埋めたんじゃないの？

さと子

私、そんなことする子どもじゃなかつたです。

春子

私はそういう子どもだつたの。

章子

さと子さん、そこから何か出て来たの？

さと子

わからない。見えなかつた。私、その子に話しかけようとしたんだけど声が出なくて、苦しくて。私のこと気がついてくれなくて。寂しくて、目が覚めると泣いてるの。そこがどこなのか全然わからないんだけど、私、確かに知ってるって思うの。

のぶ子　そこはさ、さと子さんが小さい頃遊んでた野原かもしれないじゃない。

春子　そうよ。今からさと子さんが育った町に行くんだから何かわかるかもしれないよ。大丈夫。
さと子　でも、子どもの頃に遊んでた一面のれんげ畑が、今じゃ駅前自転置き場になってるとかって、な

い？

章子　ない、ない。さと子さんの育った所は田舎だからそんなことない。

智子　私さ、このあいだ田舎へ帰って、小学校見に行ったの。全然変わってないよ。鉄棒なんてこんな高さだし、運動場なんてこんなもんだし、運梯なんてこんなもんよ。こんな所で遊んでたのかなと思うと、胸がキーンキーンしてくるの。

のぶ子　その頃の友達が昔のまんまでヒョイって出てくるような気がするよね。

春子　そうなの、そうなの。その頃の自分が出てきそうな気がするのよ。ヨッなんて言って。

章子　いやだ、それ怖いじゃない。

春子　何で怖いよ、自分じゃない。「久し振りだね」って言えばいいじゃない。

智子　あっ、人工衛星発見！

四人　エッ、どこどこ？（天を仰いで必死に探す四人）

智子　それぞれ。

四人　どれどれ。あ、あれかな。

智子　それじゃない。そこ、コレ、ホラ。

章子　どこよ。

春子　あ、ホントだ！

智子　ずっと動いてる、ホラ。

春子　あ、ホントだ、ホントだ！

全員見つけて、感極まって大はしゃぎ。ホントだ、ホントだの大合唱

春子　お星様みたいなの。ホラ、ホラ、あれはお星様よ。ホラ、あれよ、あれがそうよ。
さと子　ホントだ。

智子　どんどん向こうに動いていつてる。あれは人工衛星以外には考えられません、規則的に進んでるから。

章子 本当だ、位置が変わってる。
 さと子 すこいスピードだね。どの辺を通ってるの？
 のぶ子 どの辺ってどういうこと、さと子さん。
 春子 さと子さん、見えないの？ あれ、あれ。
 さと子 見える。ここからどの位の距離にいるの？
 四人 えっ！？
 春子 そんなのわかんないよ。智ちゃん、智ちゃん、ねえ、あれ、ホントに飛行機じゃない？
 智子 人工衛星ですよ。
 のぶ子 向こうからこっちが見えるのかな。
 さと子 人が乗ってるの？
 のぶ子 あ、人は乗ってない人工衛星かもしれない。
 章子 あれ、今、ドッキングしなかった？
 智子 しそうだった。あ、降りていつてる。あ、消えそつ。
 さと子 やっぱり帰りましょう。
 のぶ子 やっぱりって、何が。
 さと子 人工衛星が落ちてくるから。
 のぶ子 大丈夫よ。落ちるとしたら、あの辺よ。
 春子 ああ、もう見えなくなっちゃった。
 智子 まだいる。ホラホラ：
 春子 私の目じゃもう見えなくなつた。
 さと子 私にはとっくに見えない。
 章子 だんだん色が薄くなつてきた。
 春子 私には見えないんだけど、あんたは見えるの？
 章子 だんだん見えなくなる。あ、あ：
 のぶ子 見えなくなっちゃった：

スッキリ見えなくなつてしまつた遠くの空をみんなで見上げている。

春子　ねえねえ、あれ、本当に飛行機じゃなかった？

智子　飛行機じゃない。

春子　へえ、あれがそうなんだ。へえ、初めて見た。ついに私も見れたんだ。へえ、やっぱりいたんだ。どうしよう、どうしよう。ホラ、よく、見たの見たの！って騒ぐじゃない、ハマキ型とかアダムスキー型とか。連れていかれそうだったとか言うじゃない。

四人　えーっ？

のぶ子　それはUFO。

春子　だからUFOじゃない。

のぶ子　空飛ぶ円盤。

春子　だから空飛ぶ円盤じゃない。

のぶ子　人工衛星。

春子　だからジンコーエーサーじゃない。ええっ、何、ジンコーエーサーって何！？　ジンコーエーサーってドーンって打ち上げてグルグル回ってる、アレのこと？

智子　天気予報。

章子　ひまわり、アメダス。

春子　そうだすの？　なあんだ、バカみたい、騒いじゃって…。私、人工的なもの、嫌いなものよ…

さと子　ねえ、あれはUFOじゃないかしら？

章子　どれが？

春子　さと子さん、あれ飛行機。

のぶ子　ホラ、ちゃんと規則的に動いてるでしょ。

さと子　こつやつてグルグル回ってない？　未知との遭遇みたいに。

智子　どこが？

のぶ子　ホラ、音が聞こえるでしょ。

近づいてくるプロペラの音、エンジンの音は重なり合い、五人を圧倒する。
出航の合図のドラが鳴りだす。

我に返ったヘルパー四人は、それぞれ慌てて自分の荷物を持ち、船の方に向かおうとする。
さと子だけが何を思ったか、一人、立ち止まっている。

さと子 行かない！ 私、行かない。船に乗らない！！（突然、逃げるように駆け出す）

春子 さと子さん！ 何言ってるの、今さら。

四人 どこ行くの、さと子さん？ さと子さん、待ちなさい、さと子さん！

逃げるようにして駆けて行くさと子。四人は荷物を持って追いかける。

どこまで逃げる気だ、どこまで追いかける気だ。

目が回るような追いかけこの時間がどこをどうぐり抜けたのだろう。
いつの間にかどこかで見たことのある、古いアルバムから出てきたような人々が追いかけて
している。

声 さと子さま！ さとこさま、お待ちください！

声 待って下さい、さと子様、さと子様、早く、早く

港でさと子を追いかける声は、いつのまにか幼い頃のさと子お嬢様を呼ぶ、女中たちが変わって
いく。

二場 さと子お嬢様の暮らしの手帖

女中達 早く、早く。さと子様、さと子様あ、奥様あ。

何かの記念なのか、写真撮影のために集まる女中達、春や、章や、智や。
さと子、赤ん坊を抱いたさと子の母も加わり、慌ただしく撮影を終える。

母　あと、お掃除をお願いしますよ。
女中達　はい、かしこまりました、奥様。

母、去る。

春や　ねえ、ほんと奥様は奥様ね。ささ、片付けてくださいませ
智や　かしこまりましたでござりまする。
章や　お願いしますでござりまする。

智やは椅子を持って去る。春やは章やの掃除の仕方をあれこれ注意をしている

智や　お待たせしましたあ。春やに、章やにはたきを渡す

三人　よろしくお願いいたしまする。

春や　ささ、丸いところはマルクですよ。

智や　四角いところは？

春や　四角でしょ。章や何やっているのですか、ツンタツツンタツタ、もっと腰を入れて早くでしょ。

章や　はい

春や　もつと早くもつと…もつと…

章や　これが限界でござりまする。

奥から、さと子の声が聞こえる。

声　春やあ、章や、智やあ、遊びましょ

さと子お嬢様が登場する。

さと子　春や、章や、智や、聞こえないの、遊びますよあ（春やの耳元で）　春やあ！

春や

痛い。さと子さま、私たちが、はいはい、遊びましょ遊びましょと言うとお思いですか。ごらんください。私たちは今、箒とはたきと雑巾の一部となっています。ほら、見てくださいませ。（春やの足は箒になっている）

さと子

わかった！

さと子、掃除道具を奪い取って去る。

三人

何をするんですか、お待ちください、さと子さまあゝ

三人、さと子を追って退場

さと子先頭にカンカン竹馬に乗って登場

三人

お待ちくださいませ、さと子さまあゝ

さと子

初めの一步しよう！

春や

はああ？

さと子

はじめのいっぽあゝ

三人

はいはい。

全員

ジャンケンジャロメガヘヲヒッタ！

章や

さと子さま、鬼でございますよ。

さと子

はじめのいっぽ、だるまさんがころんだ。

三人

（動かない）

さと子

だるまさんがころんだ…章や、動いた、動いたよ、章や。

章や

…動いておりません。

さと子

動いた。

章や

動いておりません。

さと子

動いた。

章や

さと子さま、ずるいでございますよ。（振り向き方にいちゃもんをつける）

春や 早くしてくださいませ
さと子 だるまんがころんだ。

春や、素早くさと子のところへ、智やは逃げる準備

春や 切ったあゝ！
さと子 止まれー！とまれー！
春や さと子さま、三步でございますよ。

さと子、なんとかして触ろうと涙ぐましい開脚を試みる。

章や あと一步でございますよ。

さと子 はっ！（思いつきり腕をのばすが届かない）
智や だめでございます。ああ、面白いです。ささ、もう一度やりましょう。
さと子 誰が鬼をやるのよあ？

智や もちろん、さと子さまでございますよ。

さと子 するーい、じゃあね、じゃあね、今度は七五三やる。
春や 私はだるまさんの方が…

さと子 しちござーん！

三人 …かしこまりました。（三人、しゅしゅ並ぶ）

さと子 いいですか！せーのあー！

全員 いち、にい、さん、し、ご、ろく、しち、ヒョイ、いち、にい、さん、し、ご、ヒョイ、いち、にい、さん…

春や さと子様、これのどこが面白いんですか？
さと子 じゃあね、じゃあね、ピヨコちゃんやる！
三人 はい。

さと子 いいですかあ、さんはい！

四人　ピ、ピ、ピヨコちゃんじゃ、あひるじゃ、ガーガー！

春や　だから、これのどこが面白いのでございますか。

さと子　…つまんなーい（退場）

三人　んもう、わがままなんだから、さと子さまあ（追いかけていく）

全員、木に乗ってやつてくる。おかしなことに、その木はスケートボードになっているのだ。

さと子　ひゅーーー

三人　お待ちくださりませ、さと子さまあ。

さと子　みんな、競争しよう。いい！ここ、ゴール、あそこあそこに別れて競争します。いくわよ。位置について、よいドン！

女中達、とてつもない勢いで走り出す。さと子さまがドベ。

さと子　ずるーい、もう一回、よいドン！（また、さと子がドベ）もお、じゃあね、次は私の真似をしてくだ

さい。（さと子、スケボーを使った足技を見せる）さあ、やって見せてください。

智や　はいはい、こうでございますか？（さと子の顔を真似る）

さと子　ちよつと、ちよつと、顔じゃないの、なんなの、今の。

章や　そっくりでございますよ。

さと子　ひどーい

春や　（自分の木を指差して）あらー、見てくださいます、こんなところにみかんがなっております。

章や　見て、見て、見て！私の木には、りんごがなっております。

智や　私の木なんか、なんやかんやなっております。

さと子　ほんとだあー。あーみなさん、私の木にはトマトがなっています。

三人　（口々に）ほんとですこと。あら素敵、まあかわいい！（木の根元に腰をおろす）

さと子　私も休憩しよつと、ねえ、食べていいの？

智や　いただきますしよ。

章や 食べましょ、食べましょ。

春や これ、ほらほら、みずみずしいったりやありやしない。

章や ほら、これ、大きいったりやありやしない。

智や なーんか喉につまりそうでございます

春や これを上品に食べる人の顔、見てみたいです。章や、歯茎から血が出てませんか。

章や 大丈夫でございます。

春や 食べ物つて木陰で食べるとまた格別ね。

章や ほんとね、サワサワと風が。（木をゆする）

智や （木を揺すりながら）とってもいい感じ。

さと子 （自分の木が枝ばかりなのを見つけて）ちよつとお、木陰がない！

春や まあ、どうしたんでしょう、このえもんかけみたいな木は。

さと子 なんてみんなばかりなのよお、つまんない、つまんない。（さと子去る。）

三人 わがままなんだから。さと子さま、お待ちくださいませ。（三人去る）

四人、特大折り紙を持って登場

さと子 ひゅー

三人 さと子さまー

さと子 ねえねえ、あれ折つて。

三人 はい、はい。あれでございますね。

あらよつと声をかけながら、あらよつという間に舟が出来上がる。

さと子 乗る！みんなで乗りましょ。

三人 はい。お邪魔いたします。

さと子 気をつけてね、乗りましたかあ。

三人 乗りましたあ。

さと子 ヨーソー！

漕ぎ出した舟、水面に吹く風、心地よいひと時。

さと子 みんな、オーロラ！オーロラが出てるよ。

三人 あらま、ほんとだ。

章や ありがたいことでございます。

さと子 あーっ、鯨が飛んでる！

三人 おーい、くじらあー！

さと子 あーっ！みなさん、津波です、津波がやってきます。

智や どういたしましょう。

さと子 向こうへ逃げよう。急いでえー（みんな必死で漕ぐ）あーっ……（波にもみくちゃにされる）

あっ、晴れた！……おっ、みなさん、鬼が島です、鬼が島を発見しました！桃太郎さと子之介、鬼退治に

いつてまいります。

三人 いつてらっしゃいませ

さと子 （海に飛び込み、鬼が島を目指す。）いつてきまーす。

章や さと子さん、大丈夫かしらね。

春や 大丈夫、大丈夫、乗りかかった舟なんだから。

章や 春さん、こんなことで効果あるのかな。

春や 大丈夫。

智や こんなことやつていいんですか？

春や 私たちが決して口にしてはいけない言葉、「こんなことが何になるの」。

二人 かしこまりました。

さと子 みんなー、鬼が昼寝してるぞ、今のうちに宝を持って帰ろう。

三人 ただ今、まいります。（三人、裾をまくり海へ飛び込む。鬼が島にたどりつき覗き込んで鬼に悪態をつ

く。）

さと子 あっ、鬼が目を覚ましたあ、逃げるんだあ！

三人 わあああー！

章や さと子さま、逃げてくださいませ、鬼に食われますぞおー、おわあー！あわびがー！

智や うわー、こんなところにバフンうにがー！

さと子 みんな、こんなところに筋子もいたぞ！

春や ここになぜだか中トロもおー！

章や わかめも刈っていきまーす。

さと子 みんな、舟に戻ろ、戻りますよ。

三人 (口々に) はいはい。

さと子 料理しよう。

春や 火をおこしましよ。(三人で火をおこす) ささ、乗せましよ、ほたて！

章や あわび！

智や バフンうに！(七輪の上に次々と山のように載せていく)

章や ももう、いいんじゃないですか。お醤油かけましよ。チーチーパッパ

四人 (口々に) いい匂い、

春や もういいみたいです

章や いいですか、いただきますしよ。

智や いただきます！

春や 熱いですからね。熱い！熱い！あつ、あつ、あつ、あちや、あちやちやちやあ！(思わず章やの頭

の上に、アツアツのホタテらしきものを乗せてしまふ。)

章や 熱い！！熱いじゃないですか！もう

みんなで海の幸を食べ始める。その美味しいことといったら。熱燗で一杯でな気分になったりして。そのうち歌なんかも飛び出して、飲めや歌えの大騒ぎ。

全員(歌う) ♪懐かしい 懐かしいあのリズム

エキゾチックなあの調べ

オリエンタルの窓を開け

香るカレーのうれしさよ

ああー夢のひと時オリエンタルカレー
君知るや 君知るやオリエンタルカレー♪

みんなしこたま酔っ払っている。

春や ウエー、気持ちが悪い、オウエー

章や 指突っ込んで、指。

智や 出して、出して。

さと子 なにやってるの、ねえ、どうしたのあ？

春や オウエー（舟をつぶす）

さと子 ああ、そういうんじゃないの。ちがうー！お父さま、お父さま！女中たちが酔っ払ってるんですよー（去る）

三人 べつに、酔っ払ってはおりませんよ。さ、片付けましょ、片付けましょ。さと子さまー（舟をあっけなくつぶして持ち去る。入れ代わってさと子登場）

さと子 じゃあ、かくれんぼしよう！

春や えー？ フツウのかくれんぼでございますか？

さと子 うん！

智や 平凡なかくれんぼでございますか？

さと子 うん！

章や ありきたりのかくれんぼでございますか？

さと子 うん！

全員 ジャンケンポン！！

さと子さまの負け。オニは目隠しして十、数えます。
女中達は、我れ先に隠れ場を探す。

さと子 ひい、ふう、みい……もう、いいかい？

女中達（声） まあだだよ！ まだですよ。さと子さま、まだまだ。

さと子 もういいかい？

女中達（声） もういいよ！ よろしいですよ、さと子さま。

さと子が目隠しをとると、どこに隠れたのか、誰もいなくなってしまった庭先。裏の竹林からカサカサと枯れ葉を踏む音が聞こえる。

振り返ると、見知らぬものの影が、女中達にまじって走っている。かくれんぼで探す場所には決まってひそんでいた、怖いけれど不思議で面白いもの達だ。さと子は才二だったことも忘れてついで行く。

追いかけられたり、追いかけたり。おどかされたり、おどかしたり。

さと子の回りを回るのは、時を越えてやってきた遠い国のモンスター。

空を越えてやってきた星の光、スペクトル。

あれから幾つの歳月を数えただろう。幾百年、幾千年。

そして幾千万の年は星のまたたきとともに、さと子を巡り通り過ぎていく。幾億の光年の中、さと子は一人立ち尽くす。

さと子 …… 智や …… 章や …… 母さん …… 母さん …… 春や …… 母さん …… 母さん ……

走り疲れたさと子。お水、お水が飲みたい。

ガラスの大きなコップ。

冷たいお水。おいしいお水。

さと子、水を飲む。ゴックン、ゴックン。

遠いあの日、青い空を仰いで、冷たい水を飲み干したように、さと子、コップの水を飲み干す。

コップの底から、透き通ったガラス越しの青空が見える。

遠くのラジオから唄が聞こえる。

木の枝に風が…

子ども達の声が：

静かな昼下がりの喧噪。

その時、世界は静止する。

全てを飲み干すように、さと子、水を飲む。

さと子、世界にたった一人。

土を掘り返す音が遠くから聞こえる。庭先では、さと子の母が木箱に入った土を耕している。

母

三月はトマトの種を蒔く季節。こうして耕した土に一粒ずつ蒔いていく。そして種が隠れる程度に軽く土をかぶせる。五月の初め、もう霜や寒さの心配がすっかりなくなつた頃、トマトは立派な苗になる。まず根が伸びていくために草や木の灰、硫酸力リが必要です。これはどんな野菜にも必要なもので、丈夫な葉っぱやおいしい実をつけるためには、根が丈夫に育つことが大切なのです。このカリウム分は非常に水に溶けやすい。雨が大量に降った後は特に不足してくるので、そのつど補うこと。硫酸や油粕は葉っぱや茎のため。これがよく効いていると葉っぱは鮮やかな緑色になる。しかし与え過ぎると、かえってひ弱になつてしまうので注意すること。そして過リン酸石灰や鶏糞は実がなり始める頃に効くように、初めから土の中に入れておく。マグネシウムは葉をつややかにする。カルシウムは不足すると、せつかく出てきた葉の先が枯れてしまうので石灰を入れて土を整える。こんなふうに、たくさん栄養を含んだ土の中で、トマトは小さな種から芽を出して、豊かな緑の葉を延ばしていく。そして、初めは固い小さな緑色の実をいくつもいくつもつける。夏のカンカン照りの中でそれは、どんどん赤く色づいていく。

いつの間にか遊びあきたさと子が、縁側から庭先の母の影を眺めている。
それを見ていると心がやすまるともいうように。

母

さと子

母

さと子

ホラ、これがトマトの種よ。
夏に食べる、あのトマトでしょ。これも、じゃあトマト？
そう、トマト。こうしてね、まず土を柔らかくするの。そうしないと種が窒息してしまうのよ。
種も息するの？

母　　そう、さと子と同じ。

さと子　この種、赤い実になるって知ってるかな？

母　　そうね……

さと子　いつわかるの？

母　　これくらいの大きさになって、赤くなつた時、かな。

さと子　実がなつた後はどうするの？

母　　葉っぱや茎はね、枯れて死んでしまふの。だから実をとつた後は、早めに土から抜いてしまふのよ。

それでおしまい。

さと子　じゃあ、もうトマトはならないの？

母　　実の中にはね、種がいっぱい入ってるの。

さと子　（母のスキについて後ろから斬りつける）……………エイ！　スキあり！

母　　後ろからとはヒキョウなり。

さと子は母の後ろ姿に切りかかる。母も応戦。庭先でとよ子と母のチャンバラ合戦が始まる。
いざ、勝負！　勝負の運はその時まかせ。

さと子　ねえ、トマトさ、実になつた時、こんな小つちやな種だつたこと、覚えてるかな？

母　　……………さと子は、さと子が赤ちゃんだつた頃のこと覚えてる？

さと子　覚えてない。

母　　母さんもね、自分が赤ちゃんだつた頃のこと、全然覚えてない。さと子ぐらいの時のことも、ずいぶ

ん忘れちゃつた。

さと子　……………母さん、赤ちゃんだつたの？　さと子みたいだつたの？　母さんは母さんでしょ。

母　　……………そう、母さんは母さん。

さと子　さと子みたいな母さん……………ヘンなの。じゃあ、さと子も母さんみたいになる？

母　　そうね……………さと子はどんな娘になるのかな？

さと子　……………わかんない。

さと子はシャベルを取り、土を掘り始める。

穏やかな春の一日は、黄昏れを迎えている。その柔らかな大気を震わせて、異様なものが近づいてくる気配。

母は、危険を察知したように、さと子の手を乱暴につかみ、かけ去っていく。

音は闇を連れて広がってくる。闇の奥底からおし殺された音が湧き上がってくる。町は一変する。

見上げる青空には爆撃機が襲来し、人々は恐怖におののきながら、追いつめられていく。

逃げ惑う人々の中、一人の少女が恐怖に逃げることもできずにうずくまっている。

その両手には小さな木のオルゴールが。

遠くから少女の名前を呼ぶ声かとぎれとぎれに聞こえてくる。

はぐれてしまった娘のとよ子を探す母親のさと子だ。

さと子は、とよ子を抱えてその場を去ろうとする。

その瞬間、とよ子が生にしていたオルゴールが落ちる。

とよ子は、それを拾おうと母の手を振り払うが、さと子は慌てて引き止める。

とよ子は、なおも母の手を強引に振り払ってオルゴールを取り戻そうとする。

一瞬、激しい爆撃音がとよ子の上に。

あつけなくずれていくとよ子の身体。

さと子の叫びが炎と爆撃音の中にかき消されていく。

追い詰めるサーチライト、暗闇、逃げ惑う親子達の不協和音が最高潮に達して、唐突にすべてが消えてしまう。

前にもまして静寂が訪れる。

暗闇の中、息をひそめていた得体の知れない何かが、大きな二つの目を、ギラリと光らせて姿を現す。

大きく息を吹き返し、あえぐようにやってきたのは、一台の黒塗りの自動車であった。

クルマの中から、こぼれるように一人、また一人と出てくる。人々は辺りを威圧するようにその場を占拠する。

闇の中の、人知れずのデモンストレーション

章子

透き通る秋の空を仰げば、何となく君に待たる心地して、日が落ちて秋風が窓辺を過ぎる頃、そこかしこからキンモクセイのほの甘い香りが、私に、狂えよとばかりに匂っておりまふ。昨日の野分に、庭の落葉樹はすっかり葉を落としてしまいました。家々の屋根も、あちこちの木立も今は冴え渡る月光に濡れています。庭のコスモスは、我が世の秋と咲きほこり、梢に色ます秋の風、夕陽の窓に秋の色、楓は紅、イチヨウは黄色。灯火親しむ季節、スポーツの季節、暑さ寒さも彼岸まで、ますます御清栄のことと御喜び申しあげます。お元気でいらっしやいますか、私は元氣です。相変わらずお早いですね。いつもお元氣ですね。本当にお若いですこと。いらっしやいませ、サン キュー・プリーズ、またどうぞ。店長、一万円入ります。齒の浮くあいさつ、お愛想笑い、好きじゃない！

全員

黒潮さわぐ海越えて
風にはためく三角帽
めざすは遠い夢の国
ルソン アンナン カンボジア

はるかオランダ イスパニア

おもかじいっぱい オーオ オーオ オーオ

さと子

「お父様、お母様、長々とご心配かけましてありがとうございます。さと子、いよいよ明日、渡部家へ参ります。今日までのお教えに従って、皆様のご満足の頂きますよう努める覚悟でございます。どうぞ御安心下さいませ」

春子

本日は、御両家のお祝いの席にお招き下さいまして、誠に光栄と欣幸の限りに存じます。このような晴れがましい席上、不調法ではございますが、ここにお時間を拝借致しますて、一言お祝いのご挨拶を申し上げたいと存じます。御令嬢に御令息、前途有望、才色兼備が闊歩する結婚式の来賓挨拶、好きじゃない！ 言うのも聞くのも恥ずかしい！

全員

黒潮さわぐ海越えて

風にはためく三角帽
めざすは遠い夢の国

ルソン アンナン カンボジア

急行、快速、通勤特快、区間準急、中央ライナー、どれが早いかわからない！

智子 全員

♪ 黒潮さわぐ海越えて
風にはためく三角帽

のぶ子 全員

アメリカ牛で大騒ぎ、中国餃子で大騒ぎ、みんなとびつく国内産。そんなに国内産は安心できるのか！

裕子 全員

♪ 黒潮さわぐ海越えて
ケンカの最中に「まあまあ」とシャシャリ出てくる奴！喧嘩の相手より、あんたの方が大嫌いだ！

なほみ 全員

♪ 黒潮さわぐ
下地クリーム、ファンデーション、チーク、マスカラ、アイライナー。電車はあなたの化粧室じゃない！

とよ子 全員

♪ 黒潮
電車の中で無我夢中で鼻のソージをしている奴。取ったその手はどこに行くんだ！

さと子 全員

♪ 黒潮
孫でもないのに、おじいさん、おばあさん。姪でもないのにおじいさん、おばさんと簡単に呼ぶんじゃない。私には名前がある！

春子 全員

♪ 黒潮
「あなた何型？」「B型」「ああ、やっぱりね」やっぱりって、やっぱりって、やっぱりってナンなんだ！

智子 全員

♪ 黒潮
モデムにサーバー、拡張子、アイコン、オプション、マウスでクリック。マウスだけしかわからない！

のぶ子 全員

♪ 黒潮
「この度はまことにお騒がせしまして、心からお詫び申し上げます」それくらいのフレーズ、メモを見ないで言ったらどうなんだ！

裕子 全員

♪ 黒潮
ファンデ、ワンピ、カーデ、チョイワル、チョイモテ、チョイカワ、最後にKY、なんでも省略すれ

全員

♪ 黒潮

全員

♪ 黒潮

ばいいってもんじゃない！

全員

♪

なほみ エコエコエコエコ エコバッグ。あなたも私もエコバッグ、並んで買いましょ、エコバッグ…ってな
んなんだ！

全員

♪

とよ子 「マジウケル」って言うその！本当に受けてるのか？！「イケルんじゃない」って言うその！
本当にイケテルと思うのか？ふざけるんじゃない！

全員

♪

章子 風邪の季節、ゴホンゴホンと咳をしている人に限ってマスクをしていないのはどうしてなんだ！

全員

♪

さと子 思いやりゾーンに疲れた若者が座っている。疲れた小学生も座っている。いかがなものか？
春子 地デジ、地デジで買い替えた。液晶プラズマ大画面。狭い6畳、どこに置く？

次第に嫌いなものへの感情がたかまり、とどまるところを知らない。

高ぶりのあまり、何を嫌っているのか、嫌がっているのか聞き取れなくなる。

（即興：日頃、口には出さないけれど嫌いなもの、口にも出したくないこと、この際だから思い
つくまま言ってしまうおう）

三場

天使たちのブ레인・ストーミング

空には時折、赤や青の光が勢いよく明滅する。上空高くから落ちてくるのか打ち上げられたのか。
不快さと不安、それでいて、気持ちが高ぶるような音と光が炸裂している。
防空壕から見る爆撃のようでもあり、夏の川原の花火大会のようでもある。
おもむろに陣取るさきほどの人々。

手に持った風呂敷包みを開ける。豪華な三段重ねのお重箱！
熱い番茶もありますよ、と差し出されるポット。

春子 たまごやき。

智子 たまごやき、大好き。

章子 さともいも。

のぶ子 煮つころがし、おいしい。

春子 カマボコ。

智子 それはちよつと、遠慮します。

章子 しいたけ、いただきます。

のぶ子 ニンジン、いただきます。

春子 やっぱり日本茶が一番。

智子 しかし、どうもうまくない。

章子 まずい。

のぶ子 何故、うまくないんだらう。

春子 何がいけなかつたんだらう。

（さと子のカルテを取り出して読み上げる）渡部さと子、大正九年十二月四日生まれ。脈拍72、血圧80から150、とりたてて異常なし。食欲普通。六歳の時に父親の転勤で大連にき、十二歳まで過ごす。その後、東京の女学校を卒業。十八歳結婚、十九歳、長女出産。二十六歳、東京大空襲で七歳になる長女を亡くす。三十五歳、夫と死別。以来、病院の事務職を勤め二十三年前に退職。現在一人暮らし。二年程前から、時々頭が重い、モヤモヤするという訴え。昼間は鬱々とすることもあるが夜になると外に誰か人が来ている、部屋の隅に子どもがいる、などといわゆる夜間せん妄がみられる。それに伴い徘徊もしばしば。行動、言動から推測すると、自分を十歳前後と思い込んでいるらしい。それ以外は意識正常。

章子 意識正常といつても、自分を十歳前後と思い込んでいること自体、正常の範囲に入らなうかね。

とも子 問題はなぜ、十歳前後になつてしまつたかということ。

のぶ子 十歳前後：ですか：

章子 十歳前後…ねえ…

春子 ちよつと待つてくさいよ。（何か思い当たつたらしくカルテを見直す）二十六歳、東京大空襲で七歳になる長女死亡…このことと何か深く関わりがあるのではないだろうか。

三人 たしかに…

春子 核心的な何か…私がかんがみるに…ひよつとすると…これは…さと子が…イヤさと子の…イヤイヤさと子は…死んだ長女の霊にとりつかれているのではないだろうか。

章子 いやだ、それ怖いのではないだろうか。

のぶ子 私が思うに…それはとりつくというよりむしろ…憑依といったほうがいいのではないだろうか。

智子 どう違うのだろうか。

のぶ子 とりつくというのは（やってみせる）こうで、憑依というのはこんな感じではないだろうか。

智子 うーん、それは当たらずとも遠からず、なのではないだろうか。あの一瞬の、深い悲しみ、終わりの無い後悔、絶え間ない罪悪感。ずーっとですよ、二十六歳から現在に至るまでずーっと、何年も。

春子 何年よ。

智子 はあ？

章子 八十七歳ひく二十六歳

春子 いくつよ。

章子 四十一歳？

春子 なにがよ。

のぶ子 ネンカン

春子 はあ？

のぶ子 四十一年間

四人 …（口々に）長い、辛い、凄い、酷い。

智子 ですから、そういう長い辛い凄い酷い状況から逃れるために、さと子自身が死んだ長女として…

春子 あっ、私、なーんか、どつかで、いつだったか、そのような症例を読んだか聞くだかしたことあるような気がします。

四人 へえ。

智子 どういうことですか

春子 うーん、たとえば…歯が痛いときに、その痛さから逃れるために、自分の体の一部を抓って…
のぶ子 どこを？

春子 …このへんよ。

章子 へっ、おしりですか？

春子 好きなところ、どこでもよ。

智子 どこでもですかあ。

春子 そう、アツチャコツチャ、手の届くところならどこでもでしょ、もう。で、自分をその痛みのかたまりにして

しまうというか…ま、そんなようなことだったかなあ。ま、忘れたけどあ、とにかく、さと子と長女の因果関係をこの際、深く考察すべきかと。

三人 たしかに(四人、深い考察に入る)

春子 …考えてる？

三人 考えてます。

春子 考えてる？

三人 考えてます。

四人 (熟考する)

春子 どうよあ。

智子 …ラチ、あかないのではないだろうか。

のぶ子 あの一、話を変えてもいいだろうか。これ謎なんですけど。さと子さんて回りの状況を何だと思ってる

んでしょね。だって、大正九年生まれの十歳前後だったら、テレビは小人さんが入っている魔法の箱

で、冷蔵庫は雪の女王の住むお城ですよ。ねえ、マッサージチェアーなんかは中に閉じ込められた按摩

さんがいたりして、自動販売機はなんだ？あれだあ、ウエイトレス？とは言わないか、女給さんだ女給

さん。で、ファックスは…

章子 話を戻してもいいだろうか。先ほどの身に余る難問はチョット置いて、さと子自身が十歳前後、つ

まり大連時代に、最大の幸福があつたのではないだろうか。

智子 だとしたら何故、その幸福な場所に行くのにあんなに拒否的態度をとるのだろうか。

章子 それは、そこに最大の不幸も同時にあつたのではないだろうか。でブラックホールともいうべき空洞を

作ってしまったのではないだろうか。

のぶ子

それはいったいどういう意味なんだろうか。

春子

いや、十歳の頃というより、現在のさと子さんに決定的に足りないもの、どうしたって埋める事のできない……その……ナニよ。

章子

ブラックホールともいうべき空洞。

春子

それがあるのではないだろうか。「私には何か欠けている、どこか不満足……」

智子

そんなものは私にだってあるんじゃないだろうか。誰にだってあるんじゃないだろうか。そんなもんあるからっていちいち子どもになってたら、この世は子どもたちで右往左往ですよ。私は子どもに戻るつもりはありません。

のぶ子

私、さと子さんが今、不幸だって思えないんですけど……

春子

なに言ってるんですか。今が不幸でないとしたら「私はさと子、満八十七歳」でいればいいじゃないですか。

のぶ子

私は、自分を子どもだと思い込んでいるこの状況のことを言っているんです。だって自分の歳を忘れてもたいした不都合も無く、回りはテンヤワンヤだとしても、実際楽しそうです。それに、子どもでいたほうが大事にされるし。私だって子どもでいられるならその方がいいと思う。

智子

甘い！子どもだからってそんなにお気楽なもんじゃありません。私ね、近所のいじめっ子が通せんぼしたんで、思わず石コロ投げたら頭の真ん中にスコツンと当たって、その子、泣き出しちゃったの。慌て逃げたけど、次の日からその道を通ると吐き気がして、足なんかもつれちゃうの、仕返しされるんじゃないか、告げ口されるんじゃないかって、ずっともう私の人生マックラでした。

春子

ああああーそうだったあ。あああそうだったあ。

三人

？

春子

私、おもしろししかったの。

三人

エッー、ワァー

春子

小学校の頃よあ。クラスにみどりちゃんて子がいて、その子が一緒に帰ろうっていうもんだから、私オシッコしかかったんだけど我慢して帰ったら、みどりちゃん、歩くのはのろいし、おしゃべりだし、なかなか家に着けないの。で、ジョンジョンジョー、みどりちゃんの目の前でジョー。その夜、眠れなくてね。みどりちゃん明日学校でよっちゃんに言うんじゃないかしら、よっちゃんはいちゃんに、いつちやんは先生に、先生が校長先生に。で、朝礼で「大場春子さんを、お漏らし春ちゃんと呼びましょう」

なんてことになって。一生顔上げて歩けない。ああ、死んでしまいたいなんて思いました。
でもね、おもしろい春ちゃん。

ナニイ。今度言ったら × ……！

わかった、わかった。でもね、子でもっていうのはそういうことがあったとしてもですよ、一瞬のうちに幸せになれるんですよ。夕べ不安で怖くて眠れなくても、目覚めと共に新しい一日が始まるんです。後光がさしているんですよ。でも大人になると段々くすんでくるんですよ。辛いことがチリも積もって山になるんですよ。辛いんですよ、忘れられないっていうの。死にたくなったりするんですよ。本当に辛いんですよ。辛かったです、私。

のぶ子

…ねえ、ちよつと。やっぱり、このままさと子さんの言う通りにしてた方がいいんじゃない？
どういうこと？

のぶ子

辛いことを忘れるために子どもになつてるとも言えるわけですよ、さと子さんは。それが、何かの拍子で自分は八十七歳であるという現実に目覚めたとしたら、チリも積もって山となった辛さがどっと押し寄せてきてさと子さんを押しつぶしちゃうってことはあるんじゃない？

智子

押しつぶすって？

のぶ子

あれも辛い、これも辛い。忘れない、忘れられない。生きていけない。死んでしまいたい、死ぬしかない！

春子

ちよつと、そういうえば随分静かじゃない？ いつもなら、もうそろそろ遊ぼうとかって…

四人

………！！

全員、一斉にドアに向かって走っていく。

ドアを開けた途端、そこには、大きなマントをかぶったさと子がうずくまっている。

四人

さと子さん！ おばあちゃん！

さと子

フッフッフッフ…。私は、遠い国からやってきた魔法使いのマハリクマハリタ・ヤンバラヤンヤンだ。あつ、私に隠れてタマゴヤキを食べてる。私に黙って食べるとは卑怯者。タマゴヤキはどこだ！

のぶ子

さと子さん、ほら、ここにありますが、さと子さんのタマゴヤキ。

さと子 (一口食べる) ン!? 違う、これは違う。あ! だましたな。悪い魔法のタマゴヤキだ。これは、一口食べると醜いおばあさんの姿になってしまっただ。でも、そうは問屋がよろしませんよ。そうはさせないから、エイ、ヤツ。(お重のこちそうを手づかみにして投げ捨てる)

春子 さと子さん、やめて下さい。おばあちゃん!

家政婦たち、一瞬かたまる。

春子 おばあちゃんはこのを食べなくなつて、もともとおばあちゃんですよ。

さと子 もともとおばあちゃん? ナニソレ? もともとしていう名前のおばあちゃんがいるの?

四人

さと子 …… おばあちゃんって誰なの? もともとして誰なの? お前がもともとか、それともお前か。ウー苦し

い、どうも変だ。胸が、胸が悪くなってきた。

智子 何を言ってるんですか。このタマゴヤキは、おばあちゃんのために私が作ったんです。

さと子 違う! 私は遠い国からやつてきた魔法使いのマハリクマハリタヤンバラヤンヤンだ。お前は、

お前は誰だ!

智子 えっ!? …… わ、私は魔法使いの…… ジェニーです。

さと子 そうか、お前が魔法使いのジェニーか。

春子 (タマゴヤキを一切れはおぼる) さと子さん、おばあちゃん、ホラホラ、ホラね、何ともないですよ。

さと子 お前は誰だ!

春子 わ、私? 私は…… 魔法使いのジェニーの妹の…… 魔法使いのジョニーよ。

さと子 おまえ達はグルだな! グルめ、グルメー!

のぶ子 さと子さん、ニンジン! これは毒消しの魔法をかけてあるの。これを早く食べて。

さと子 お前は誰だ?

のぶ子 私は…… いいもんの魔法使いのリリーよ。

さと子 私はニンジン嫌いだ。

章子 さと子さん、これはニンジン型の柿ようかんです。私がようかんをニンジン型に変えたんです。

さと子 お前は誰だ。

章子 私は、いいものの魔法使いリリーの妹の、魔法使いのコリーよ。

さと子 (ニンジン型のようかんを一口食べる) ウェー。このニンジン型の柿ようかんは、味までニ

ンジンの味がする。気持ちが悪い、水をくれ。

章子 ハイ、ハイ。(お茶を差し出す)

さと子 (一口飲む) 違う！これはお水じゃない。お茶じゃだめ、お水。お水が飲みたい。

のぶ子 さと子さん、ではリリーの魔法でお水にしてさしあげましょう。ホニヤパラヘンソケフニヤララケ：

さあ、これでいかがでしょう。

さと子 (飲む) 少しも変わってない。魔法使い落第！

春子 わかった、わかった。私の特製の魔法で……フニユラホンダラ……水になれ！みんなも、ホラ、呪文唱えて！

四人 フニユホンダラ……水になれ！

さあ、これでいかがですか。

さと子 (魔法をかけたお茶を一口飲む) 少し変わった。……でも全然違う。みんな魔法使い失格！おいしい

お水が飲みたい。(コップを投げつける)

智子 もしかしてさと子さん、六甲の自然水とか、秩父の名水とかそういうの要求してるの？

章子 さと子さん、あのね、三段重のお弁当には、熱いお茶をつめるものの、水筒には。

さと子さん、喉乾いてるんでしょ。一口飲んでみれば？ やっぱ日本茶が一番だよ。

さと子 お水……

章子 ここにはお水はないの。お茶しかないの。さと子さん、それくらいわかってるでしょ。(コップにお茶

をつぎ、さと子に無理やり持たせる)

さと子 お水が飲みたい！(またもやコップを投げつける)

智子 わかったわよ。私、探してくる。

章子 探すってどこを。

智子 そんなのわかんないわよ。

のぶ子 どこ行くつもり？

智子 そんなのわかんないわよ！！(あてもないまま凄まじい勢いで行ってしまっ)

のぶ子 どのに行くつもりなの？(智子を追いかけて走り去る)

章子
春子

……（二人の後を追う）

さと子さん、水なのね、本当に水なのね。それで気が済むのね。（あてのないままに立ち去る）

一人になったさと子、何をするでもなくうずくまっている。

そのうちに、目の前のお重のおかずに手を延ばし、そして……一口、お茶を飲む。

忘れようとしているのか、本当に忘れてしまったのか。かくれんぼで才二だったことを忘れて一人遊びをする幼いさと子のように。

さと子

……待つて、待つて。……早く早く……まあだだよ……もういいかい……よろしいですよ……

……そう、そうね……わかんない……じゃあ、さと子と同じ……さと子みたいな母さん……

……そう、トマト……実の中には種がいっぱい……葉っぱや茎は死んでしまうの、それでおしま

い……母さんは、母さん……さと子みたいな……さと子……さと子さん……トマトの種……赤

い実になる……夏に食べるトマト……三月はトマトの種を蒔く季節……こうして耕した土に一粒

ずつ蒔いていく。そして、種が隠れる程度に軽く土をかぶせる。五月の初め、もう霜や寒さの心配が

すっかりなくなつた頃、トマトは立派な苗になる……

さと子は一人、砂遊びを始める。自分の中に埋まつた何かを掘り出そうとするかのようにいつまでもいつまでも、砂を掘り続ける。

自分の中に重なる時間を解きほぐすように、誰に話すともなく言葉をつないでいく。

あたりは次第に日が落ちて夕暮れ時。その姿が掘つた穴に隠れてしまふ頃、その土の中から出てきたのは、どこか懐かしいおばあさん達だ。

ウキウキした様子で彼女達は、あちらこちらから家の屋根や橋や木、電信柱を運んできて、楽しい遊びを始める。どこかで見たことのあるあの町この町が、出来上がっていく。

あの坂道を上ると、線路。線路の向こうは空に続いている。あの角を曲がると、人さらいの出没する空き地。電信柱が早くお帰りと見下ろしている。そして、果てしなく広い空、遠くまで伸びる道。家々の窓には灯がともる。

その町並みをおばあさん達は見え隠れしながら遊びを終えて、帰っていく。

夜の闇がその町に降りて、さと子と世界を優しく包んでいく。
高い空はまばゆい星の光りに満ちて、夜は更ける。

やがて、濃い群青の空が少しずつ光りに照らされてくる。

夜明け。この町にまた今日も、新しい朝がやってきた。どこかの家のラジオから歌が聞こえる。

『新しい朝』の歌だ。

♪ それイチニイサン！

その声はしだいに大きくなってきて、朝の六時半。町のあちこちからブルマー姿のおばあさん達がラジオ体操に集まってくる。

声 ラジオ体操第一、はじめ！

号令に合わせて、体操するおばあさん達。さと子は朝の大気をいっぱい吸って、珍しいものを見るようにあちこちを散歩する。

ラジオ体操を終えたおばあさん達が。体操カードを見せながらさと子に寄ってくる。

おばあさん達 ハンコ、ハンコ、ハンコ下さい。

さと子 ハンコ…… ハイハイ

家のタンスの中から、ハンコを取り出し一人一人に捺す

おばあさん達 じゃあね、ありがとございます。（元気に去っていく）

さと子、縁側に座ってお茶を入れる。

さと子

（お茶を一口飲む）あーおいしい。……不思議なものです。今までそこにあつたものがなくなると、初めのうちは悲しむけれど、いつの間にかそこにあつたことを忘れてしまふ。そしていつか、忘れていくことさえ忘れてしまふんです。お向かいのお家を取り壊されました。新しいお家に建て替えるそうです。竹垣も古くなって、壁もずいぶん汚れていましたから。あの竹垣がなくなるのは寂しいけれど、建てかえたらきつとすてきな塀ができるでしょう。「塀にはツルバラをからませたい」っておっしゃってましたから。……タケガキが…

監督（春子） カット！

さと子の姿をとらえる一台のカメラが音もなく近づいてきて、そこはそのまま、映画撮影の現場となっていた。監督以下スタッフが見守る。

監督

隣の竹垣に……隣の竹垣に……隣の竹垣に竹立てかけたのは、竹立てかけたかったから、竹立てかけた。

さと子

隣の竹垣に竹立てかけたのは竹立てかけたかったから竹立てかけた。

監督

ヨーシ！ いこうか。

助手（のぶ子） シーン73、カット6、テイク2。

監督

ヨーイ、スタート！

カチンコになる。カメラが回り始めて、撮影は再開される。

さと子

不思議なものです。今までそこにあつたものがなくなると、初めのうちは悲しむけれど、いつの間にかそこにあつたことを忘れてしまふ。そしていつか、忘れていくことさえ忘れてしまふんです。お向かいのお家を取り壊されました。新しいお家に建て替えるそうです。竹垣も古くなって、壁もずいぶん汚れていましたから。あの竹垣がなくなるのは寂しいけれど……建てかえたらきつとすてきな塀ができるでしょう。竹垣が…

監督

カット！

スタッフ一同に緊迫した空気が流れる。

監督 …… お茶…

助手、さと子にお茶をもっていく。

監督 おいしいですか？ …… うれしい？

監督はスタッフに指示を出す。スタッフはさと子に着物を着せ、草履をはかせ、髪を整える。
決め手をはかりかねた監督、スタッフたち、集まってどっという手でいこうか悩んでいる。

さと子 髪、染めましょうか。

監督 …… !

スタッフが鏡、化粧道具を差し出す。さと子は自分の手で髪をひとすじ、ひとすじ白く染めていく。

さと子は鏡に写った、次第に年をとっていく自分の顔にじっと見入っている。

監督 では、いきます！

助手 シーン73、カット6、テイク3！

監督 ヨーイ、スタート！

カチンコがなる。カメラが回る。

監督、スタッフがさと子を見守っている。

さと子

お向かいの家が取り壊されました。新しいお家に建てかえるそうです。竹垣も古くなって、壁もずいぶん汚れていましたから。あの竹垣がなくなるのは寂しいけれど、建てかえたらきつとすてきな塀が

できるでしょう。「塀にはツルバラをからませたい」っておっしゃってましたから。昨日の夕方、お向かいに行ってみると、空き地に柱や壁が崩れて山積みになっていました。お台所からは時々、お夕飯の匂いがしてきたなあ、ここいらには物置があつたはず……あの辺には南天の木が植わつていて……でも、どうしてもはつきり思い出せないんです。……不思議なものです。今までそこにあつたものがなくなると初めのうちは悲しむけれど、いつの間にかそこにあつたことを忘れてしまう。そしていつか、忘れてのことさえ忘れてしまふんです。シーンとしたその空き地には、小さなガレキのがあるだけです。山の上に洞穴を見つめました。もうすっかり夜になっていて、ちよつと怖かつたけど、そつと覗くと、その奥には星がいっぱい見えたのです。その中に一つ、特別に青く光っている星を見つめました。まるで私に何か合図を送っているような光です。いつか家政婦さんがこんなことを言っていました。星の光は何億年の何億倍の、計り知れない長い時間をかけて私達の目にうつっている。その光が私の目に届いた時にはもう朽ちて失くなっている星もあるんですよつて。空から降つてきうなその光は遠い空、遠い昔をあつという間に駆け抜けてこの私にうつっている。その時、あの星と光と私がうずを巻いて、この私の回りを包むように回っていくようでした。おかしいですね、そんなことを考えるなんて。たつた一軒の家が失くさただけなのに……。それからね、家へ帰つて、いつもの木戸を開けました。いつもの縁側、いつもの庭先、いつもの空気なのに、どこかクツキリ透明なのは何故でしょう。何だかとても気持ちよくつて、とっても嬉しくつて……。おかしいですね。明日は、朝起きて、顔を洗つてご飯を食べて、熱いお茶を飲んで、それからいつもの庭の手入れをします。あおきの虫を取つてあげて、咲きかけのたちあおいにお水をあげて……それから三月に植えたトマトの実を摘みましょう。青い実はいくつ赤くなっているかしら。明日が楽しみ。

さと子が木戸を開けると、そこには一隻の船が出航を待ち受けている。

タラップは静かに降りて、さと子を迎えている。

さと子はしつかりした足取りで、タラップを一段一段上がっていく。

家政婦達が駆け込んでくる。一人で出発するさと子を見送る。

さと子、行ってきますのVサイン。

さと子は八十七歳の大海原に向けて出発する。

その明日には、きつと楽しみがいっぱいだ。

今度こそ、
B O N
V O Y A G E !

終わり